

プルーストと喘息

鈴木道彦

1

作家の病氣といえ、真先に私の頭に浮かぶものなかにドストエフスキーの癩癩とプルーストの喘息がある。これはこの二人の作家の最も本質的なものと関係があると私は思う。もしドストエフスキーが癩癩でなかったとしたら、ただ『白痴』が書かれなかっただけではなく、たぶんわれわれの知るドストエフスキーは存在しなかったことだろう。またもしプルーストが喘息でなかったら、『失われた時を求めて』も『ジャン・サントゥイユ』も書かれはしなかったであろうし、それ故にマルセル・プルーストは存在しなかったにちがいない。そしてドストエフスキーもプルーストもいなかったとしたら、世界の文学はずいぶんと趣を変えていたであろう。だからこれらの病氣はたまたま二人が身に蒙った不幸というようなものではなくて、遙かに重大な意味を帯びた文学的事件なのである。私が本稿でプルーストと喘息の関係を考察しようと思うのも、そのためにほかならない。

ごく表面的に眺めただけでも、喘息の影響はプルーストの作品に顕著に現れている。だから伝記の事実を何も知らない読者でも、注意深く作品を読めば必ずそこに病氣が色濃く影を落していることに気づくはずなのである。たとえば、「長いあいだ、ぼくは夜早く床に就いてきた。ときには蠟燭を消すとたちまち眼がふさがり、『ああ、眠るんだな』と考える暇さえないこともあった。しかも30分ほどすると、もうそろそろ眠らなければという思いで眼がさめるのだった」というのは、余りにも知られた『失われた時を求めて』の書出しだが、その直後にすでにプルーストは次のように記しているのである。

やがて12時だ。それは、病気だというのにやむを得ぬ旅行に出かけて、見知らぬホテルに泊らなければならなかった人が、発作を起こして眼がさめたときに、ドアの下からもれる一条の朝の光を見つけて喜ぶ瞬間である。助かった、もう朝になったんだ！ じきに従業員が起きてくる、ベルも押せるし、助けにきてもくれる。楽になれるという希望が、苦しみに堪える勇気を病人に与える。ちょうどそのとき彼は足音を耳にしたような気がする。足音は近づき、そして遠ざかる。ドアの下からもれていた朝の光は消えてしまった。12時だ。いまガス燈を消したところだ。最後の従業員も行ってしまう、こうしてひと晩中、薬もなしに苦しみつづけなければならないのだ。⁽¹⁾(傍点筆者)

この発作がどんな性質のものかはここでは説明されていないが、一種病的な雰囲気とごく神経質な気分を満たした文章のなかに、さりげなく滑りこませた発作の比喩は、語り手にとって実はきわめて深刻な意味を含んでいるのである。じじつ読者はやがて、彼が病身で医者からヴェネチア旅行も劇場に行くことも禁じられ、真綿でくるまれるように大切に育てられていることを知るだろう。⁽²⁾さらにこの語り手は或るとき突然発作を起こし、原因不明の窒息に苦しんだ後に、それが重症の喘息であると判明するだろう。⁽³⁾この病気で語り手の生活は一変する。彼の赴く場所も（したがってそこでの出会いも）喘息によいか否かで決定されることになるし、彼が馬車の窓を開け放しにできなかったり、花のために気分が悪くなったり、しばしば窒息の発作を起こすことも、作品の背景に一貫して流れる主題になるだろう。⁽⁴⁾つまりこの語り手はたえず発作の恐怖におびえている人間なのである。してみると、彼が冒頭で「発作」になぞらえた不安な夜の意識とは、まさに喘息患者の不安や苦痛が生み出したもの、と考えることができはしないか。

『失われた時を求めて』だけではない。プルーストが24歳から29歳までのあいだに執筆して放棄した長篇小説『ジャン・サントゥイユ』においても、まず序章でこの小説の架空の作者とされているCは「枯草熱」のために郊外に行くことのできない者として描かれているし、⁽⁵⁾また主人公のジャンも喘息とリウマチのために、25歳で跳んだり走ったりできない人間になった、とされている。⁽⁶⁾このほか、処女出版『愉しみと日々』に収められた短篇にしても、後年のエッセイにしても、プルーストが病気に重要な役を与えた例は数限りない。

その基盤になっているのは、プルースト自身の喘息の経験である。では、それほどのようなものであったか。私は以下に、可能な限りにおいて、その実体と意味を探っ

てみたい。

2

彼が最初に激しい喘息の発作に見舞われたのは、9歳のとき（1881年）であったと推定される。それは、誰もが引用する2歳年下の弟ロベール・ブルーストの明快な証言があるからだ。

マルセルが9歳の年、われわれが友人のD……たちと一緒にプーローニュの森の長い散歩から帰ったときだったが、マルセルは恐ろしい窒息の発作に見舞われ、驚愕した父の面前であやうく息を引取りそうになったことがある。この日を境にして、似たような発作の再発にたえずおびやかされる苛酷な生活が始まった。⁽⁷⁾

多くの伝記作家、とくに医者として伝記を書いたロベール・スーポーは、この発作の遠因をブルーストが生れながらの病身であったことに帰している。そしてブルーストが病身に生れついた理由として、彼が胎内にあった頃のコミュヌの乱のために母の覚えた極度の不安を挙げている。⁽⁸⁾じじつブルーストの母ジャーヌは、夫アドリヤンを戦乱の Париに残したままオートゥイユに逃れて、ここでマルセルを出産するのであるが、こうした母親の不安な心理状態が胎内の子供の体質に与える影響については、私は何も語る用意がない。

ところで、ここに不思議な証言がある。それは上記の弟ロベールのもので、彼は必ずしも兄マルセルが生来極端にひ弱な体質だったとは考えていない節があるのだ。

記憶の最初の結晶作用が行なわれるあの曖昧な時期まで、私の幼年時代の思い出の流れをどこまで遡ってみても、私が必ず見出すのは、無限の優しさで私を包み、いわば母親のような慈愛で私を見守る兄のイメージである。そして奇妙なことに、われわれの人生の最初の時期の胸を衝つこの心象が、ほとんど常に燦々と日の光を浴びた郊外の心象と結びついていることを私は発見する。というのも、たぶん兄が5歳、私が3歳ぐらいと思われるこの時期に、兄はまだ健康をひどく損ねてはいなかったからだ。兄が身体をこわすのは数年後のことで、その結果いっさいの戸外の空気と春とから逃亡することを、兄は余儀なくされたのである。⁽⁹⁾

断定は控えねばならないが、弟ロベールの記憶によれば、兄マルセルは或る日、不意に思いもよらなかった発作に襲われたのではないか。上掲引用の中の「奇妙なこと

に」という言葉などは、ひ弱なマルセルという伝説（おそらくは、マルセル・ブルースト自身がかなり積極的に広めたと思われる伝説）に、控え目に異議を申し立てている。しかもこのロベールは、父アドリヤンのあとをついでブルースト家の医学の伝統を守った人物であり、たとえ幼年時代の回想とはいえ、医学的にも彼がまったくの出たらしめを言うとは考えられない。そうだとすれば、9歳の発作までのブルーストは、むしろ頑健な子供とは程遠かったにしても、他の子供たちと余り変らぬ幼年時代を過ぎたのかもしれない。少なくとも、ブルーストの誕生する前に母が覚えた不安などという、本人にはとうてい手の届かぬ偶然によって、彼の喘息体質が（したがって彼の喘息が）あらかじめ決定されていたと見なすのではなくて、むしろ9歳までの彼の生によって、徐々に喘息発作が準備されたかもしれぬと考える可能性を、この証言は残しているのである。私には、その方が自然に見える。というのも、喘息が過保護に育った裕福な家庭の長男に圧倒的に多いということは、実にしばしば指摘されていることであって、それはこの病気が微妙な幼児心理と密接にからんでいることを示しているからである。いずれにしても、弟ロベールの証言から、今はとりあえず以上の問題点のみを押えておきたい。

9歳のマルセルを急襲した発作は、ロベールの証言から推測すれば、当時の表現でいう「枯草喘息」、すなわち花粉と結びついた発作のように思われる。ブルースト自身も後に書いている。「私は何よりも、そして疑いもなく、重症の喘息です。最初は枯草喘息でしたが、たちまちそれが夏季喘息になり、ついでほとんど年間を通じての喘息になりました」と。⁽¹⁰⁾ 枯草喘息とは、今日という言葉でいう花粉アレルギーの発作であって、花粉が抗原（アレルゲン）となり、それが体内に侵入して抗体（レアギン）を生じ（これを感作状態と呼ぶ）、次にまた同じ抗原にふれるとアレルギー反応により喘息の発作が始まるのであるが、しかしこの当時、アレルギーという現象はまだ知られていなかった。⁽¹¹⁾ 花粉が枯草熱や気管支喘息の原因になり得ることは分っていたが、それさえブルーストの発作の数年前（正確には1873年）に、初めて本格的に報告されたものにすぎない。⁽¹²⁾ それでもブルーストの父親は医学の大家であったから、直ちに当時として可能な処置を執ったはずである。まだアレルギー論に基づく治療（脱感作療法）はなかった時代だから、基礎的治療として考えられたのは、転地だったり、神経症体質 *nervosisme constitutionnel* の改造の試みだったりしたのであろう。⁽¹³⁾ とくにこの体質と神経の関係は重要であって、それは本稿でも後にもう一度ふれることになるはずである。

ところで今日では、喘息の多くをアレルギー性のものと見なすのが、ほぼ常識とな

っている。だがまた全ての喘息発作をアレルギーで説明できるわけでないのも、私の調べた全資料の一致した見解である。現にアレルギー説のほかにも、自律神経失調説（迷走神経の緊張）、内分泌調節異常説、感染説、心理的ストレス説などがあり、なかには馬に接すると喘息を起こす人が映画の馬を見て発作に陥った例を報告している書物もある。じっさい喘息という病気のむつかしさは、心身の条件の複雑微妙なからみあいが発作をもたらすという点にあるのだろう。メダルド・ボスはこの問題にふれて、愛情なしの結婚に同意した途端に重い喘息になった婦人の例や、上司から面罵されて喘息発作を起こした者の例、不公平な遺産配分や、スキャンダルにおびえる不安な感情までが、喘息の原因になった例などを挙げている。⁽¹⁴⁾ だがこうした心身医学の立場に立っても喘息のすべてが解明されるわけではないのであって、だから久徳重盛のように、これは「心身の問題が強く関与するアレルギー性疾患であり、純粋な心身症とは考えるべきでない」という立場も生じるのである。この久徳重盛は内山道明とともに、「アレルギーを基礎とした全体医学説」を主張しているのであるが、⁽¹⁶⁾ これは一つの原因で発作を説明する一元論を排して、気管支喘息の多元論を主張するもので、アレルギー感作状態の存在と、抗原が体内に入ることとを、発作の一応の条件とした上で、生理的なバランスの乱れや心理的な動揺を「喘息準備状態」としてこれにからめた考え方である。もしもアレルギーを喘息の基本に据えることが正しければ、これはほぼ妥当な折衷案として受入れることができるであろう。⁽¹⁷⁾

以上のことをふまえてブルーストの喘息発作を振りかえってみると、たとえその症状からしてこれを花粉アレルギーらしいと言ってみても、それだけではこの病気について、ほとんど何も語ったことにならないことが分るのであろう。単なる病因論としても、アレルギーがどうして起こったのかということが正しく説明されなければならないし、また後述するごとき9歳の発作以後に辿った病気の経過から判断しても、この喘息の正体はかなり複雑なものではないかという疑いが生じるからである。

この点にかんする研究者の態度は、およそ二つの方向に分れる。一つはごく機械的に病因を推断するだけで満足する立場であって、たとえば『マルセル・ブルーストの作品に対する喘息の影響』の著者ジョルジュ・リヴァヌは、いとも簡単にこれを「アレルギー性のものである」と断定している。⁽¹⁸⁾ 同じくアレルギー説のロベール・スーポーや、自律神経失調説のピエール・モーリヤックの主張も、この部類に入るであろう。⁽¹⁹⁾

これに対して第二の立場は、ブルーストの喘息の複雑な性格を認めて、とくに母の愛を求めるところに深い病因を探るものであって、浩瀚な伝記を書いたモーロワもペインターも、⁽²⁰⁾ この説に傾いているようだし、またブルーストの遺族の激怒を買

った問題の書物『マルセル・ブルーストの⁽²¹⁾秘密』の著者シャルル・ブリヤンも同様である。

こうした心因性喘息を重視する見解は、言うまでもなく精神分析派の人びとに広く支持される考え方である。だからミルトン・L・ミラーの『ノスタルジア——マルセル・ブルーストの⁽²²⁾精神分析的研究』も類似の立場で喘息に一章をさいているが、とくに興味深いのは弟の存在を強調するE・ジョーンズの⁽²³⁾論文であって、彼は弟の誕生によって特権的地位を失ったブルーストが、それを取返そうとする秘かな欲望のために全力を注いだ結果、たった一つの方法である病気のなかに逃げこんだことを、きわめて明快に主張している。

これはいずれも推測以上のものではない。けれども神経質な親の過保護の影響や、長男および一人っ子に喘息が多いことと並んで、兄弟間の心理的問題が発作の引き金になる例もすでに多数報告されているのだし、またブルーストと弟のあいだには、⁽²⁴⁾数少ない資料を通じてではあれ、かなり複雑な葛藤のあったことが想像されるのであるから、これを唯一絶対の原因と見なしてよいかどうかは別にしても、⁽²⁵⁾病因を考える上で弟の存在は決して軽視できないもののように思われる。それというのも、単に喘息が一元論で片づかない病気であるのみではなく、多くの病気が、物としての身体にたまたま起こった故障などといったものでないことは、今日ますます明らかになってきたからである。病気は或る状況を生きる人間の全的な表現の一つなのである。

しかしながらブルーストの場合、単に9歳のときの発作の原因を探るだけでは何一つ確実なことを知り得ないであろう。それは資料が絶対的に不足しており、発病の具体的な記述も弟ロベールの証言以外に何もないからである。むしろ、このように限られた資料から強引に病因を断定するよりも、発作以後のブルーストがどんな風に自分の喘息を受入れたかを知る方が、はるかに重要ではなからうか。彼は喘息とどんな関係を結び、どう喘息を[・]生きたか、それを[・]記述することは原因の推定以上に有効であろう。なぜなら、そこにブルーストが自ら作り出した喘息の意味が顕著に見えるはずだからである。

この点でわれわれに多くの情報を与えてくれるのは、ブルーストの珍しい書簡であり、なかでも母親とのあいだに交された手紙は示唆的である。

われわれの知るマルセルから母あての最初の手紙は16歳のときのものと推定されているが、そこで息子は長々と彼の健康状態を報告している。その一節を引用してみよう。

或る晩（ルーヴル美術館にいった日の晩です）、ぼくは余り消化のことも気にせず、でもおそい時間にたっぷり夕食をたべて寝たのです（デザートを三皿も）。眼が覚めたとき、ぼくはひとり部屋のなかで驚きの声を上げました。口中も爽快だし、穏やかにぐっすり眠れたからです。その次の日は、したがって、むろん前日よりずっと好調でした。その日の午後、ぼくはいつものように歩いて、それから叔父さんの馬車に乗ったりして、ブローニュの森に行きました。すると眠りは重苦しく、口のなかがとても気持ち悪いのです。

そこでぼくは次のように考えました。

たったひと晩のあの気持のよかった夜の前日は、こんな風に過ぎたのだ、と。

その日はアカシア通り⁽²⁶⁾ではなくて、ルーヴル美術館の出口で叔父さんに会ったのだから、ブローニュの森では箱馬車に乗ったままだったのです。

その翌日は森に行かないようにしました。

すると、お八つも夕飯も（まったく偶然に）たっぷり食べ、お祖母さんから散々お小言も言われたのに、

口のなかに嫌な味は一つもないのです。⁽²⁷⁾

ブローニュの森を箱馬車に乗らなければ通れないのは、むろんアレルギーのためだが、同時に祖母の小言もふだんは体調に関係してくることを示す文字のあることが注目される。それはともかくとして、このように健康状態を細々と知らせるのは、彼の母あての手紙の決った型なのである。発作があったかどうか、夜はよく眠れたかどうか、薬や、喘息を抑える吸入や、エスピック煙草などを用いたかどうか、そうしたことを息子は後年まで、詳細に報告している。それはブルーストの健康が母の最大の関心事になっていたという意味であり、またブルースト自身は、母に心配をかけていたわられる存在であることをすすんで受入れ、そうした存在を母に提示していたことを証明している。

そこから、母と子の書簡の（つまりは二人の関係の）目立った特徴が生れる。すなわち母が常に保護者であり、助言者であるのに対して、マルセルは常にこどもであり、当時流行しはじめた表現で「わたしの可愛い狼」Mon petit loup と母に呼ばれる存在でありつづけた、ということである。つまり彼は病氣を利用して、おとなになるのを拒否しつづけるとともに、必死で母に甘え、母の愛を独占しようとつとめていたのであった。

ブルーストには、一生涯を通じて或る幼児性、一種の退行現象が見られるけれども、

その重要な原因は、いたわられる病人という特権的な存在への固執にあったと私は思う。その結果、彼は常に受身の存在でありつづけたし、彼においては主体よりもまず客体が優位を占めることになったのである。これは、原因こそちがえ、サルトルの解明したジャン・ジュネやフローベールの資質に通じるものである。ともあれ彼の書簡に一貫して見られるのは、客体に逃避することによって自分を母親の独自の愛の対象たらしめようとするプルースト固有の戦略である、とすることができよう。

しかし書簡よりもさらに明瞭にこのことを暴露しているのは、彼の作品、とくに『ジャン・サントゥイユ』と『失われた時を求めて』の冒頭部分である。この二つの作品では作者の姿勢に微妙な相違があるけれども、いずれも主人公ないし語り手を体質的に過敏な神経を持って生れついた病人として描き、しかもそれが他者（とくに母親）によって承認されるという事実を強調していることに変わりはない。たとえば『ジャン・サントゥイユ』である。

「この子は神経のせいで苦しんでいるんだわ」という母の言葉、ジャンがあんなに後悔した悲鳴や嗚咽を、意志によらない神経の苛立ちのせいにして、それをジャンの責任ある意志から引離し、こうして彼をたいそう喜ばしたこの言葉は、彼に一時の歓喜以上のものを与え、彼の生涯に深い影響を及ぼしたのであった。(……) ジャンがそれと懸命に戦ってきた過敏な神経が、依然として悲しむべきものであってももはや罪あるものとは見なされなくなった日、過ちを回避する義務の代りに病気をいたわるという特典のみを考えればよくなった日に、幼いときからジャンが四六時中自分自身を支えてきた苛酷でかつ爽り豊かな闘いは終了したのである。⁽²⁸⁾

ここで神経と言っているのは、母に対する強すぎる愛情のことであり、いかなる代償を払っても母を自分のそばに惹きつけておこうとして、一種の錯乱の発作に陥った7歳の少年の状態のことである。そしてプルーストは常にこうした状態を、「責任ある意志」つまりは主体に対立させる。⁽²⁹⁾ 言いかえれば、錯乱は体質であり宿命であって、本人の自由にならないものであるというのだ。だがまた、作者がここで喘息を念頭においているのも明らかである。まず第一にこの主人公は後に喘息に悩まされるのであるし、また『失われた時を求めて』では上述のごとく、いっそう周到に、狂気のように母を求める語り手の興奮を引出すべく準備された冒頭の不眠の夜の苦しさを「発作」になぞらえているのだし、さらに神経症体質こそ喘息をもたらすというのは当時のごく一般的な考え方でもあったからだ。⁽³⁰⁾ つまり母への過度の愛とは、喘息と同じく体質から発したものであり、それは本人にもどうにもならない運命であるから、そこ

から起こるいっさいの責任は本人には免除される、ということになる。これは甚だ虫のいい考えと言うべきだろう。なぜならブルストは、その喘息体質ゆえに、母の愛情や心遣いを享受して当然だと主張していることになるからだ。

いったい体質とは何だろう？ 人間の誕生の地点で何が決定されているかを考えれば、そのときに絶対に変更の許されない宿命としての体質の存在などは認めないこと、少なくともそれを最小限に押えることが、われわれの当然の態度でなければなるまい。なるほど人は背が高かったり低かったりするし、髪の色もさまざまだし、また障害を持って生れたり、そうでなかったりする。これに類した外部的な、また内部的な、さまざまの肉体的特徴もあるだろう。それらを、人に与えられたぎりぎりの条件と言ってもいい。また、幼児にはどうにもならない他者の存在、すなわち家族と、それにまつわるさまざまな問題も、与えられた条件を構成すると考えることができる。しかしその条件がどれほど圧倒的なものに見えようとも、それを宿命とするのは、多かれ少なかれその本人の誕生以後の生き方ではないか。体質もまた同様であって、誕生の偶然によって構成されているように見えながら、同時に体質はわれわれ各人が作り出していくものでもあるはずだろう。いずれにしても運命や宿命という発想は、人が未来を志向する自由存在である限り、これを最小限にとどめることが要求されるだろう（逆にひたすら過去を振り返るなら、いっさいはすでに決定されていることになり、だからこそマルローの「死は人生を運命に変える」という言葉が生れるのである）。

したがってブルストが『ジャン・サントゥイユ』のなかで、意志ではどうにもならない神経の作用を大幅に認めたとき、彼の時間性的特徴をなす過去志向は明瞭に決定されたと言っている。それと同時に、神経＝肉体が彼の自由にとって手の届かぬもの、すなわち一個の客体であり他者であることも判明したのである⁽³¹⁾。しかも神経によって惹起された興奮や錯乱は、本人にとってもともと後めたいものなのであるから、肉体＝悪という発想もすでにここには含まれていたように思われる。そのテーマをブルストは後に大がかりな形で『失われた時を求めて』のなかに展開することとなるだろう。

それだけではない。『ジャン・サントゥイユ』には、神経を病む者へのいくつかのアポロジーさえ見られるのである。しかもこの小説が書かれたのは1895年から1900年にかけて、作者が24-29歳のころであるから、もはや少年ブルストではなくて成年以後の彼の病気に対する態度決定が問題になるだろう。それを見るためには一旦作品を離れて、この時期のブルストの実人生の問題を検討してみなければならない。

3

ブルーストにとって喘息が重大な意味を持つのは、これが決して9歳のときの発作とその直接の結果のみに限定されるものでなかったためである。というのも彼は一生この病気とつきあうことになるからであって、最初の発作については多分に推測に頼らざるを得ないにしても、後の発作にかんしてはブルースト自身の言葉が残っており、それがこれを考える手がかりを与えてくれるのである。

そうした後年の発作のなかでまず興味を惹くのは、おそらく1894年のそれであろう。この1894年は、ブルーストにとって決定的な時期の一つであった。このとき彼は社会的におとなになるか否かの岐路に立っていたからである。

その前年、22歳になったブルーストは、しきりに両親（とくに父親）に就職を迫られた形跡がある。まっとうな職業に就いてほしいというのは、たいていの父親が子供に対して抱く願いだろうが、ブルースト家もその例にもれなかったばかりか、田舎町からバリに出て来て見事に一家を成した父アドリヤンは、自分が出世街道を驍進しただけに人一倍その希望を持っていたように思われる。その事情はこの頃の一連の手紙が語っている。

お父さん、

ぼくはかねがね自分が文学や哲学の研究に向いていると思ひ、いつかそれが継続できるようになればと願っていました。でも毎年ぼくにはますます実務的な仕事を与えられるばかりなので、むしろぼくは今すぐ、お父さんの言う実務的な職業を選びたくまりました。ぼくは外交官試験なり、古文書学校の入試なり、お父さんのお望みのものを本気になって準備するつもりです。

だがそのあとで、彼は未練がましくつけ加えている。

それでもぼくは依然として、文学と哲学以外のどんなことをやろうと、ぼくにとってそれは失われた時だ(32)と思うのですけれど。(榜点筆者)

この手紙は1893年9月末のものとして推定されるが、それからの2、3年はブルーストにとって一生の別れ道だった。平凡な外交官ないし図書館司書になるか、作家ないし哲学者になるか。と同時に、この前年にブルーストはエドガール・オーペールという端正な美貌のスイス青年と知合い、その年にはウィリー・ヒースを知り、それぞれに

強い友情を抱きながら二人とともに若死にされ、さらに倒錯の詩人ロベール・ド・モンテスキウを知ったのも1893年ごろだったから、これは彼自身が異性の友人と同性の友人とのあいだで覚えるあやしい混乱に戸迷いはじめた時期でもあったろう。レスビエヌの問題を描いた最初の習作「夕暮れのひとつき」が発表されたのも同年12月であり、おそらく同性愛者としての自覚もこの辺りから始まったものと推定される。私は喘息と同性愛にもなんらかの関係がありはしないかと疑っているのだが、この問題にはいまはこれ以上深入りしない。ともあれ彼が猛烈な喘息の再発に見舞われたのは、今の父あての手紙から数カ月した1894年の5、6月だった。⁽³⁴⁾

そのときまで、なるほど喘息は少年マルセルの持病になり、中学もしばしば休む羽目になったけれども、長ずるとともに徐々に発作はおさまって来てもいたのである。少なくとも、若干の特典はあったにせよ、1889-1890年には一年間の志願兵をつとめることさえできたほどであった。だが1894年にぶり返した喘息は、もはや二度と彼を去ることがないだろう。またそれは通常の職に就くことを著しく困難にするだろう。さらにまたブルストはそれ以後喘息を、さまざまな機会に、口実として持出すことを覚えるだろう。

それでも彼は両親の懇請に負けて、マザリン図書館司書の試験を受け、1895年6月から出勤することになるのだが、希望しなかった納本課に配属され、ついで文部省の納本課に出張を命ぜられると、健康を理由にして仕事を逃れようとする。しかし彼自身がすすんで試験を受けた以上、これは理にかなわぬことであり、マザリン図書館長がブルストのことを「健康そのもの」と判断したのは、当然であった。⁽³⁵⁾ところでその時期のブルストの姿を描いているものに、ブルストがたいそう可愛がっていたリュシャン・ドーデーの回想がある。

ときどき私はマルセル・ブルストを探しに学士院の図書館に行った。彼は枯草熱（彼のあらゆる不快や、後の生活条件を作った元兇である枯草熱）への用心から、手に噴霧器を持っていたが、それには何かの消毒液がいっぱいつまっていた。⁽³⁶⁾

噴霧器を手から放さぬ司書というのは荷厄介な存在というべきだろう。また消毒液が人体に有毒であるのも、当時すでに常識となっていた。⁽³⁷⁾とすれば、これは自己防衛のためのブルストのデモンストレーションだったのかもしれない。いずれにしても彼は父のコネなどを利用して次々と休暇を獲得することに成功し、獲得と同時に1895年の7月から9月にかけて、まず母とともにドイツのクロイツナッハに、ついでレーナルド・アーンとともにサン・ジェルマン・アン・レ、ディエップ、さらにプルトー

ニューへと、精力的に旅行を試みている。その旅先で彼が堰を切ったように書きはじめたものこそ『ジャン・サントゥイユ』であった。しかも生れて初めての長篇に取組みながら、一方で彼は文部大臣あてに（なぜなら、出張を命ぜられて文部省の管轄下にあったからだ）直接に次のような手紙を書いている。

私の神経性喘息は、二カ月の休暇をいただいたために殆ど全快に近い状態ですが、なおこれを完治させるために、10月15日より11月15日まで、一カ月間の休暇を申請する次第であります。⁽³⁸⁾

これによって、ブルーストが喘息を口実にして最初の休暇を得たことが判明する。ただしこの手紙が本当に投函されたかどうかは明らかでない。分っているのは、旅先での執筆のためにあらゆる用紙を動員しなければならなかったブルーストが、書き損じたこの手紙の裏に『ジャン・サントゥイユ』の草稿を書きつけていることである。つまり創作への情熱と、病気を口実にして仕事を逃れようという作戦とが、文字通り表裏一体になっていることをわれわれは知り得るのである。こうして自伝的小説の創作へ向けての第一歩を踏出した彼は、以後二度と納本課の職場に戻る事がなかったのである。

『ジャン・サントゥイユ』で主人公の将来がしきりに議論されるのはそのためだろう。母親は、裁判官、外交官、弁護士といった「きちんとした職業」⁽³⁹⁾を選ばせたいと言い、祖父のサンドレ氏は「ジャンが詩が好きになるとしたら」という娘の言葉に怒りを爆発させて、詩人たちのような「やくざ連中」を口をきわめて罵倒するが、これはブルースト家でも見られた情景だったかもしれない。これに対して作者はしきりに、文学の選択をこの習作を通じて擁護しようと試みている。そしてそのために彼が援用するものこそ病気の存在なのだ。

この病気が『ジャン・サントゥイユ』の中で神経症体質として描かれていることはすでに見た。だがそれだけではなく、この作品には病気を一つの表現と見なす態度もすでに現れているのであって、それはたとえば次のような言葉に示されている。

われわれの感受性もまた微妙で頑丈な器官を備えており、それは、余りの激痛に押しつぶされそうになると、気を失ったり、呆然自失したり、眠りこんだり、または熱を出したりして、そうしたものの名において、入りこめない薄い覆い⁽⁴¹⁾を感受性の上にかぶせてしまうのである。

この狡猾で明晰な病人は、自分の病気について十分に知り尽くしていたのではないか。

このような言葉を書くことができるのは、発熱や病気によって感受性の苦痛を逃れた者、しかもそのことを意識している者だけではないか。つまり喘息の発作もまた、一つの防衛手段だったのではないか。いや、それ以上であって、プルーストはすでに病気に積極的な意義さえ認めていたらしいのだ。次の一節はその例証である。

医者というのは、上手な女性歌手の歌を聞いたり、価値ある作家と知合いになったりするの好きな人間である。その歌手が風邪を引こうともお構いなしに、医者は彼女に言うだろう、「いいじゃありませんか、だってあなたはこんなに歌がうまいのだから。」また作家がいくら不眠に悩まされようとお構いなしに、医者は彼に言うだろう、「いいじゃありませんか、だってあなたは素晴らしい本をお書きになるのだから」と。なぜなら医者は知っているのだ、素晴らしい本を書くのは眠れない人であり、自分を病人と思っている人であり、手当の仕様もない喘息持ちであり、医者にかかる人であり、そしてそうしたことが彼の才能の一部をなしているのだと⁽⁴²⁾いうことを。

喘息であるにもかかわらず才能があるのではない。喘息こそ才能に不可欠なものなのだ。或いは喘息とは一つの才能なのだ。プルーストはそう主張する。そうだとすれば、彼がますます喘息に固執し、文字通り宿痾を養うことになるのは目に見えている。だがプルーストはさらに先へ進んでいる。彼にとって病気は単に才能の一部というだけではなく、生命そのものの支えにもなるのだ。『ジャン・サントゥイユ』序章で、この小説の架空の作者とされるCに枯草熱の持病があると記されていることは上述したが、そのCは、死によって初めて自分は枯草熱から解放されるのだと語った後に、自分の世話をしてくれるフェリシテという女中の次の言葉を伝えている。

ついこのあいだまで、私はまだ希望をつないでおりました。でも旦那様が田舎にいらしても、くさめもなさらなければ息もつもらせないのを見て、ああもう、今度⁽⁴³⁾という今度はお終いだ、余り長くは保たない、と自分に言いきかせました。

この記述では、喘息が生命のしるしになっているのである。しかもこれをわずか24-25歳の青年が書いたことを思えば、彼が後半生を送る上で喘息が単なる持病どころか、生のよりどころにさえなったことも容易に理解できる。それを示す資料にもわれわれは事欠かない。たとえばリュシヤン・ドーデーの次の言葉を見ればよいのである。

マルセル・ブルーストは、彼がしばしば診てもらったアルベール・ロバン教授の甚だ奇妙な次の言葉を、しきりに私にくり返した。すなわち、「私はたぶん、あなたの喘息をなくすことができるでしょうが、でも私はそうしたくないのです。あなたはすっかり喘息になりきっておられるし、またあなたの喘息の型から見て、これは一種の捌け口になっていて、あなたを他の病気から守っているのですから⁽⁴⁴⁾」

ブルースト自身もアントワヌ・ピベスコあて1904年7月の手紙で書いている。

ぼくはフェザンと並び称される名医のメル克蘭に診てもらったのだが、それによるとぼくの喘息は神経の習慣になっていて、これを治す唯一の方法は、ドイツにある喘息療養所に入院することなのだそうだ。もし万一そこに行ったら仮定すれば(なぜって、ぼくはたぶん行かないだろうから)、モルヒネ中毒の患者からモルヒネ⁽⁴⁵⁾を取去るように、ぼくの喘息という「習慣を失わせ」てくれるのかもしれない。

これを見ると、ブルーストが必ずしも喘息から解放されたいと願ってはいなかったことがうかがわれる(「なぜって、ぼくはたぶん行かないだろうから」)。なるほど彼は常に発作に苦しみ、発作を恐れていたろうが、しかしまた喘息の苦痛は彼の慣れ親しんだものになり、彼の一部と化していたのであって、彼は喘息を通して物を見たり感じたりする習慣から離れられなくなっていたのだろう。だからこそ、これを棄ててドイツの療養所に入ることは問題外だったのである。

そうであってみれば、初めに引用したように『失われた時を求めて』の冒頭で作者が不眠を「発作」と比較しただけでなく、さまざまな経験を喘息に比較している理由もうなずけよう。彼の作品にはこうした例が数限りなく見られるが、それは喘息がブルーストの認識や見方になくはならぬものになっていたためである。

とはいえ私は、さきにもふれた『ブルーストの作品に対する喘息の影響』を書いたジョルジュ・リヴァヌのように、すべてを強引に喘息へと還元するつもりはない。彼によれば、無意識的記憶は抗原抗体反応と関係があり、文体は喘息患者のそれであり、継起的自我すなわち自我の分断と細分化の思想も喘息の発作から来るといふ。私はそうした個々の事実の説明に喘息を利用する必要はないと思うが、それはブルーストと喘息の関係がもっとはるかに本質的だと考えるからである。たとえばリヴァヌは、土地の名に詩的イメージを汲みとる周知のテーマにかんして、その起源は純粹に効用の問題であり、喘息患者にとって呼吸のし易い場所としにくい場所の区別にある、と⁽⁴⁶⁾言う。なるほどブルーストがその点に敏感だったことは疑いの余地がない。しかしそ⁽⁴⁷⁾

うした治療上の問題や実的な利点よりも、ブルーストはまず第一に喘息による土地の剝奪を蒙ったのではないか。父の故郷イリエは、毎年復活祭の休みはもとより、他の季節にも頻繁にブルースト一家の訪れる土地であったが、喘息の発作以後のマルセルにとっては花粉アレルギーのために禁じられた土地となった。ほとんど禁じられた、と言うべきかもしれない。というのは、それでもごくたまにマルセルが、両親とともにイリエを訪れたことが分っているからである。そうした例外はあるにせよ、喘息の発作を恐れるブルーストにとって、イリエが容易に行かぬ場所になったことは明らかである。重要なのは、こうした土地の剝奪、土地の喪失である。それがブルーストにとって、なんの変哲もない田舎町イリエをコンブレーに昇華させたのであり、また自由にイリエに行き得た幼年時代を楽園たらしめたのであろう。というのも、あらゆる楽園は失われたものであり、不在のものでしかないからである。

人はしきりに楽園を夢みる。あるいはむしろ、次々と数多くの楽園を夢見るのであるが、それらはみな、人が死ぬよりはるかに以前から失われてしまった楽園であり、たとえそこに行き着いても人は自分が道に迷い失われたと思うであろうようなところである。⁽⁴⁸⁾

ブルーストにおいて、喜びは、不在でなければ一旦失われなければならない、という構造もまた、そこに由来する。

その上、ますます病気がちになったぼくは、ごくありふれた快樂でさえ到達困難であったばかりに、いっそうこれを過大評価したい気持になっていた。⁽⁴⁹⁾

よくあることだが、記憶によって集められた思い出のかずかずかに再会するときに誰しもの感ずるあの喜びは、病人の場合いっそう強いものなのだ——肉体的苦痛にさいなまれ、日々全快の希望を抱きつづける病人は、この思い出に似通った光景を自然のなかに求めに行くこともできず、だが他方ではやがて自分もそこへ行けるようになると思っているために、欲望と空腹の状態^{タブロー}で思い出とじっと相対しているもので、これを単なる思い出や^{タブロー}絵画のように見なしはしないものである。⁽⁵⁰⁾

ここまで来ればもう明らかだろうが、喘息はブルーストの想像力の根柢なのである。人は不在のもの、あるいは眼に見えないもののみを想像することができる。そしてブルーストが想像に生涯を賭けたのは、喘息によって禁じられていた体験を彼が熱望していたからである。それが少なくとも一つの重要な理由である。そのことを彼が明確

に意識したのは、やはり1894年の発作の後だった。つまり、就職を迫る両親に対して、自分の仕事はやはり文学ではないかと考えはじめていた時期である。なぜなら、1896年の処女出版の文集『愉しみと日々』の序文のなかで、彼はこう書いているからだ。

ぼくがまだほんの子供だったころ、聖書のどんな人物の運命にもまして惨めなものに見えたのは、ノアの運命だったが、それは大洪水のために40日のあいだ方舟に閉じこめられていたからである。後にぼくは何度も病気になり、いく日ものあいだやはり「方舟」の中にとどまっていなければならなかった。そのときぼくは理解したのである、方舟は閉ざされており、地上は夜であったにしても、ノアは方舟の中からのように世界をよく眺めたことは一度もあり得なかつたろう、ということ⁽⁵¹⁾を。

ブルーストは喘息のために、その生涯を方舟に閉じこめた。方舟とは、彼の想像を可能にする場所であり、彼の虚構の成立する地点だったのであろう。

(1981年8月)

(本稿は、マルセル・ブルーストの形成を明らかにするために、さまざまな視点を選んで行なわれる研究の一部である。)

注

1. Marcel Proust: *A la Recherche du Temps Perdu*, Bibliothèque de la Pléiade, tome I, p. 4.
2. *Ibid.*, tome I, p. 393, p. 439.
3. *Ibid.*, tome I, pp. 495-497.
4. *Ibid.*, tome I, p. 782, tome II, pp. 926, 1109, 1125.
5. Marcel Proust: *Jean Santeuil*, Bibliothèque de la Pléiade, p. 200.
6. *Ibid.*, p. 312.
7. *La Nouvelle Revue Française*, N° 112, 1^{er} janvier 1923, "Hommage à Marcel Proust," p. 24.
8. Robert Soupault: *Marcel Proust, du Côté de la Médecine*, 1967, pp. 48-50.
9. *La Nouvelle Revue Française*, N° 112, p. 24.
10. ジョルジュ・リノシエあての手紙。(Correspondance de Marcel Proust, tome IV, Plon, p. 250)。

またルイザ・ド・モルナンあての手紙にも次の言葉が見える。

「毎年私は5月15日から7月1日までのあいだ、滑稽な——しかもまたひどく苦しい——病気に悩まされます。それは枯草熱と呼ばれていますが、むしろ花粉熱なのです。」(Correspondance de Marcel Proust, tome III, p. 334)

11. アレルギーという表現は、1902年にフランスの学者リシェ（1850-1935）の提唱したアナフィラキシーの現象（現今の「ペニシリン・ショック」のごときもの）を受けて、オーストリアの小児科医ビルケ（1874-1929）が1906年に提唱したものにすぎない。
12. ファインバーグ『アレルギー』岩波書店、p. 15, p. 39, および久徳重盛・内山道明共著『喘息の治療と心理』誠信書房、p. 34. などを参照。また19世紀末のフランスでの喘息理解を知るには、E. Brissaud: *L'Hygiène des Asthmatiques*, Masson et Cie, 1896が参考になる。枯草喘息についても、同書は pp. 148-156 でふれている。これはブルーストの父アドリヤンが監修した医学叢書の1冊で、監修者自身の序文があり、またマルセルは著者のブリソーに直接診断を受けているだけに、重要な文献である。
13. E. Brissaud, *Op. cit.*, p. 23 et sqq.
14. メダルド・ボス、三好郁男訳『心身医学入門』みすず書房、1966年、pp. 59, 67-68, 70. 同じような例は、池見酉次郎の多くの著書・編書（『精神身体医学の理論と実際』、『心療内科』、『心で起こる体の病』など）にもふれられている。
 なお、メダルド・ボスは、ハイデガーの現存在の分析をふまえて、フロイトの精神分析とピンスワンガーの「精神医学的現存在分析」を越えたところに、その心身医学を構築しているように思われるが（M・ボス『精神分析と現存在分析論』参照）、しかし彼がフロイトに対して批判する「自然科学的態度」を彼自身は完全に免れているであろうか。鈴木秀男の指摘する「現代精神医学のいう《心身相関》とは、ようするに《身体》の部分が部分と相関するということとなんら変わりがない」（「気管支喘息論（一）」『試行』1975年7月号）という批判は、ボスにも留保つきで当てはまらないであろうか。この点について私はいささか疑問を持っているが、これは本題からそれる故に今は問題の指摘のみにとどめたい。
15. 久徳重盛『小児の気管支喘息』金原出版株式会社、1970年、p. 28.
16. 久徳『小児の気管支喘息』p. 36. 久徳・内山『喘息の治療と心理』pp. 15-22.
17. アレルギー論の立場に立つとき、一般には害のない物質を有害な抗原たらしめる喘息患者の特殊性の決定が問題になる。これは普通アレルギー体質ということで説明されているが、鈴木秀男のように、「実際は、アレルギー性疾患にかかったという事実を唯一の根拠にして、その個体がアレルギー体質と知っているだけで、なにを称して《体質》（あるいは素因）というかはかならずしも明確にされてはいないのである」という批判もある（「気管支喘息論（二）」『試行』1975年11月号所収）。同じ論文の中で鈴木秀男はまた、「気管支喘息についていえば、抗原抗体反応が発作の原因であるという保証はかならずしも存在しないのであって、抗原抗体反応は気管支喘息が成立した結果あらわれる現象であってもよいはずだ」とさえ言っている。これは喘息ないしアレルギーという言葉の意味を逆転させる刺戟的な注目すべき発言と思われるが、専門外のことゆえ、結論は慎しみたい。
18. Georges Rivane: *Influence de l'Asthme sur l'Œuvre de Marcel Proust*, la Nouvelle Edition, 1945, pp. 57, 65.
19. Robert Soupault, *Op. cit.* Pierre Mauriac: *Aux Confins de la Médecine*, Grasset, 1926.
 なお、Rivane, Soupault, Mauriac が、いずれも医師の立場でブルーストの作品に接近してこのような結論しか与えられなかったことは、注目に値する。
20. André Maurois: *A la Recherche de Marcel Proust*, Hachette, 1949. George D. Painter: *Marcel Proust, a Biography*, 2 vol., Chatto & Windus, 1959, 1965.
21. Charles Briand: *Le Secret de Marcel Proust*, Editions Henri Lefebvre, 1950.
22. Milton L. Miller: *Nostalgia, a Psychoanalytic Study of Marcel Proust*, Kennikat Press, 1956. pp. 187-204.
23. E. Jones: Marcel Proust et son frère, in *Bulletin de la Société des Amis de Marcel Proust et des Amis de Combray*, N° 12, 1962.

24. たとえば、久徳・内山著、前掲書、p. 82. 小林節雄『ぜんそくとアレルギー』文研出版、p. 58.
25. この問題については、拙稿「ブルーストと不在の弟」(『ちくま』1975年7月号)参照。その文章の中で私が用いた資料は、第一に Fallois 版の『サント・ブーヴ反論』に再現されている「ロベールと仔山羊」(*Contre Sainte-Beuve*, Gallimard, 1954, pp. 291-297)であり、第二に、ブルーストの手帖に記されているメモであった(これは Kolb の手で、*Cahiers Marcel Proust 8*, Le Carnet de 1908, Gallimard, 1976, p. 56 に再現されている)。この二つの資料によって、当初ブルーストが弟を作品に登場させてこれに母を奪う者という意味を与え、作品全体の起爆剤のごとき役割を演じさせようと計画していたことが、ほぼ推察されるのである。またその弟の存在がブルーストのあらゆる作品から抹殺されているという事実も、この資料によって意味を与えられると考えられる。なお、上記の文章のなかではふれなかった第三の資料として、現在バリの国立図書館に保存されている62冊の草稿ノートのうちの Cahier IV を挙げておきたい。その f^{os} 44r^o-45r^o には、明らかに複数の兄弟の存在を示す文字があって、これは作品の語り手とその弟を示すと考えられるのである。これについては、*Cahiers Marcel Proust 7*, Etudes Proustiennes II, Gallimard, 1975, p. 242 の注3を参照のこと。
26. プーローニュの森のロンシャン大通りの別名。
27. *Correspondance de Marcel Proust*, Tome I, Plon, 1970, pp. 99-100.
28. *Jean Santeuil*, Bibliothèque de la Pléiade, p. 210.
29. これは、“Jean Santeuil”執筆当時から一貫したブルーストのテーマである。たとえば、1896年に刊行された“Les Plaisirs et les Jours”に収められた短篇“La Confession d'une Jeune Fille”にも、まったく同じテーマが展開されている (cf. *Jean Santeuil*, pp. 86-90, 222)。
30. この点については、Brissaud, *Op. cit.*, pp. 23, 24, 130 などを参照。
31. このことを強調するために、作者はトランプ占い師が主人公のジャンに凶兆のあらわれていることを警告し、ジャンの両親はそれを息子の健康への警告と受取ったことを記している。病身とは、トランプのカードのように、偶然に与えられた運命なのである (*Jean Santeuil*, pp. 215-6)。
32. *Correspondance de Marcel Proust*, tome I, p. 236. 就職の問題については、同じ書簡集にある Charles Grandjean への書簡や、Bulletin des Amis de Marcel Proust et des Amis de Combray, N° 6 (1956)に掲載された Philip Kolb の文章を参照のこと。
33. Robert de Billy: *Marcel Proust, Lettres et Conversations*, 1930, Ed des Pratiques, pp 37-54, p. 101.
34. *Correspondance de Marcel Proust*, Tome I, Plon, pp. 288, 292, 293.
35. Marcel Proust: *Lettres à la N. R. F.*, 1932, Gallimard, p. 278.
36. Lucien Daudet: *Autour de Soixante Lettres de Marcel Proust*, Gallimard, 1929, p 18.
37. Brissaud; *Op. cit.*, p. 6 (Introduction par Adrien Proust).
38. Philip Kolb: Historique du Premier Roman de Proust, in *Saggi E Ricerche di Letteratura Francese*, vol. IV, 1963, p. 232.
39. *Jean Santeuil*, p. 203.
40. *Ibid.*, p. 214.
41. *Ibid.*, p. 613.

42. *Ibid.*, p. 732.
43. *Ibid.*, p. 201.
44. Lucien Daudet: *Op. cit.*, p. 36.
45. *Correspondance de Marcel Proust*, tome IV, p. 196.
46. Rivane: *Op. cit.*, pp. 99–100.
47. たとえば *A La Recherche du Temps Perdu*, Bibliothèque de la Pléiade, tome III, pp. 839–84. を見よ。
48. *Ibid.*, tome II, p. 859.
49. *Ibid.*, tome I, p. 787.
50. *Ibid.*, tome III, pp. 26–27.
51. *Jean Santeuil*, p. 6.